

本セミナーは、宮沢賢治が出会った当時の音楽(SPレコード盤)を蓄音機で聴きながら検証します。

宮沢賢治にとっての音楽

宮沢賢治にとって音楽は欠かせない存在でした。書物と同じように自分自身の体験を豊かにし、活力や喜び、そして慰みを得ると同時に自分自身が作詞・作曲したり、詩誌や替歌などの文学作品にとり込んだり、劇の歌や伴奏音楽として使ったり、詩の朗読の伴奏に使ったりもしましたし、知人や教え子への音楽的感化のためのツールとしても欠かせないものでした。

賢治のレコードの活用

- ・自分自身の音楽体験を豊かにする。
- ・活力や喜び、また慰みを得る
- ・知人や教え子への音楽的感化。
- ・レコードコンサートの企画・選曲・解説。
- ・詩語・替歌など文学作品に取り込む。
- ・劇の歌や伴奏音楽として使用。
- ・詩の朗読伴奏用音楽として使用。

佐藤泰平「宮沢賢治の音楽」(筑摩書房)より

賢治の周辺には音楽がいっぱいありました。

賢治自身が収集したレコード、レコード会社の新譜カタログ、盛岡高等農林学校時代の恩師(玉置邁つとむ)からの影響、親友の藤原嘉藤治のレコードや楽譜、無声映画の楽士たちによる伴奏音楽、浅草オペラ、賛美歌・・・そして自然界のさまざまな音。

何事においても知らないと気が済まない気性と鋭敏で柔軟な感受性は賢治の生まれながらのもの。沢山の音楽を歌ったり、聴いて楽しみながら使えそうなものを探し出す。それは、音楽に対する深い認識力や洞察力を持っていないとなかなか出来ない。選んだ節に自分の歌詞をあてはめたり、曲を文学作品に取り込んだり、詩の朗読の伴奏に使ったり、レコードコンサートなどを通じて知人や教え子たちに音楽的感化を与えたりと、もはや日常の生活に欠かせない存在となっていました。

●藤原嘉藤治の証言

「私が一番困ったのは、いっしょに散歩すると、土質でも畠の作物でも、星でもなんでも、目にふれるものがなんでも解って、話がぐんぐん飛んで、返事にこまることでした。ただ「ハア、ハア」と返事をするだけで、引っぱられてゆくだけで、とんでもない散歩でした。図書館にいった本を読んできて、一ぺん読むと忘れないので、詩を書くときポンポンどんな言葉も出てくるのですな。音楽の場合もそうです。新しいレコードで、シューベルトを聴いたりベートーヴェンを聴いたりしますと、すぐその楽聖たちの伝記や曲の解説を、原書で読みあさり、あとまで忘れないのです。音楽のことなども、ですから専門の私よりずっとくわしく知っています」
横田庄一郎「チェロと宮沢賢治」より

●宮沢清六の証言

「レコード熱の方は音楽専門の藤原嘉藤治氏を知る(1921年)に及んで益々高まるばかりだった。やがてしっかりした解説書といっしょに英国盤の「月光」や「運命」の組物が入って来たときの兄の喜びは大したもの、「この大空からいちめに降りそそぐ億千の光の征矢はどうだ。」「繰り返し繰り返し我らを訪れる運命の表現の素晴らしさ。おれも是非ともこうゆうものを書かなければならない。」と言いながら書き出したのが「春と修羅」である」
宮沢清六著『兄のトランク』(「兄とレコード」ちくま書房)より

●「音楽に関する賢治のあこがれも強く、手持ちのレコードを学校に持ってきては、よく音楽会をやった。根子吉盛らの記憶によれば、かなりひんぱんにということである。初めて聴く西洋音楽ですからね。わたしたち生徒には、何が何だろうかさっぱりわからなかったのですよ。でも、先生はじっと聴きながら、『あっ、海辺で大きな帽子をかぶった人の帽子のつばが揺れている』とか、『あっ、雷が鳴っている』とか、音楽の中に、いつも景色のようなものまで見ていたのです。音楽を聴いて即興の文を書いたり、絵を描いたり。また逆に、文章や絵を見て、それを音に表したりというのは、きわめて高度の情操教育の手だてであって、現代でもまだそのモデルが美しく結晶されているとはいえない。それを賢治はあの時代にすでに模索していたのだろうか」

畑山博著「教師・宮沢賢治の仕事」より

●賢治の鑑賞法は視覚型絵画的である。教え子が遊びにゆくと、よくレコードをかけて、「どんな風景ですかいってください」と聞く。自分でも、「ほら、風が吹いているところだ。ここは海岸だ。今、西洋婦人のボンネットの孔雀の羽がふさふさゆれている」などという。幻覚がすぐ浮かぶのである。賢治はリズムのしっかりした曲が好きだ。ベートーヴェンやバッハのような作曲家を買う。

佐藤成著「証言 宮沢賢治先生」より

自身が作った歌としては、「剣舞の歌」「牧歌」「星めぐりの歌」「月夜のでんしんばしら」「イギリス海岸の歌」「大菩薩峠の歌」「北ぞらのちぢれ羊から」「太陽マジックの歌」(童話「イーハトーブ農学校の春」)等があげられますが、童話・劇・短編を含めた数の約3分の1の38篇にそれぞれ歌が入っているともいわれて

います。

どんな場面でどのように登場しているか、時系列にそって実際に当時の SP レコード盤を聴きながら検証します。

1, 出会い 1918(大正七)年～1921年頃 最初に聞いたレコード

“大正七年頃に私共は初めて従兄のところで洋楽のレコードを聞いたが、兄はそのとき、永い間砂漠旅行で渴していたものが水をむさぼり飲むとでもいう風に見えた。それらのレコードが懐かしく思い出されるのだが、それは「シエラザード」や「レオノーレ」や「エグモント」のようなオーケストラ曲のバラもの10枚位で、その後間もなくベートーヴェンの「第四交響曲」とチャイコフスキーの「第四交響曲」とハイドンの弦楽四重奏曲「雲雀」などの一部分ずつが手に入った。”

宮沢清六著『兄のトランク』「兄とレコード」(ちくま書房)より

M1 ●交響曲第4番 第2楽章(ベートーヴェン)／ヴェセルラ・イタリアン・バンド(吹奏楽版)

2, 農学校の教師時代 1921(大正十)年12月～1926(大正十五)年3月

M2 ●兵士の合唱 Soldiers' Chorus (グノー)／ニューヨーク・グランド・オペラ

歌曲「角礫行進曲」

氷霧はそらに鎖(とざ)し、

落葉松(ラーチ)も黒くすかれ、

稜礫(りょうれき)の あれつちを、

やぶりにわれらはきたりぬ。

(天のひかりは降りも来こず、

天のひかりは注ぎ来ず、

天のひかりは射しも来ず。

タララララ タララララ タラララ)

かけすの歌も途絶え、

腐植質(フームス)はかたく凍(こご)ゆ、

角礫のかどごとに、

はがねは火花をあげ来し

M3 ●It's a Long, Long Way to Tipperary(ジャズ／ウィリアムス)／アメリカン・カルテット

童話「フランドン農学校の豚」やオペレッタ「飢餓陣営」で「私は五聯隊の古参の軍曹」と題した替歌で登場する。

M4 ●スイミング ワルツ(作者不明)／東京帝国劇場専属管弦楽々手 随想『イギリス海岸』劇『饑餓陣営』

片面にはマサニエロ 歌劇「ポルティーチの啞娘」より(オバール) 「マサニエロ」『春と修羅』／東岩手火山

随想「イギリス海岸」より(抜粋)

それから私たちは泥岩の出張った処に取りついてだんだん上りました。一人の生徒はスヰミングワルツの口笛を吹きました。私たちのなかでは、ほんたうのオーケストラを、見たことも聴いたことのあるものも少なかったですから、もちろんそれは町の洋品店の蓄音器から来たのですけれども、恰度そのやうに冷たい水は流れたのです。

*文中の「町の洋品店」は、義弟の岩田豊蔵さんの「岩田洋品店」

童話「土神ときつね」(ローレイ)、『チューリップの幻術』(二人の擲弾兵)といった作品にも登場する。

3、『春と修羅』に出てくる楽曲

M5 ●交響曲第6番「田園」第2楽章(ベートーヴェン)/ビクター・コンサート管弦楽団 「小岩井農場」(『春と修羅』
「弓のごとし」とベートーヴェン「田園」

ベートーヴェンの「田園」は、賢治作品『春と修羅』に収められた「小岩井農場」にイメージを重ね合わせたといわる大切な曲だ。賢治は、小岩井農場で一日を過ごし、その情景を「小岩井農場」の詩に織り込んだ。「田園」を“静かに聴き分けてみると小川の流れ鳥の声が聞こえる”などと云ったそうだ。また、第2楽章の幽玄ともいえる美しい主題に、「弓のごとく」のことはあてはめたとされている。 佐藤泰平著『宮沢賢治の音楽』(筑摩書房)より

M6 ●序奏 ロンド・カプリチオーソ(メンデルスゾーン)/ヴェセルラ・イタリアン・バンド 「小岩井農場」パート三
「小岩井農場」パート三

……どうしたのだこの鳥の声は
なんといふたくさん鳥だ
鳥の小学校に北谷宇陀(きたたにうだ)
雨のやうだし湧いてるやうだ
居る居る鳥がいつぱいにゐる
なんといふ数だ 鳴く鳴く鳴く
Rondo Capriccioso
ぎゅつくぎゅつくぎゅつくぎゅつく
あの木のしんにも一びきゐる
禁猟区のためだ 飛びあがる
(禁猟区のためでない らゅつくぎゅつく)
一びきでない ひとむれだ
十足以上だ 弧をつくる ……
(ぎゅつく らゅつく)

M7 ●「魔弾の射手」序曲(ウェーバー)/ロザリオ・ボールデン指揮ビクター交響楽団 「小岩井農場」パート七

M8 ●ワルツ「女学生」(ワルトイフェル)/J・ストランスキー指揮 N.Y.フィルハーモニック・オーケストラ
「青森挽歌」(「春と修羅」/オホーツク挽歌)、童話『黄いろのトマト』

M9 ●歌劇 ウィリアムテル序曲 Overture part1 暁のモチーフ(ロッシーニ)/ビクター・コンサート・オーケストラ
「風景とオルゴール」異稿(「春と修羅」)

佐藤泰平氏は、賢治教え子の佐藤栄作氏(花巻農学校 5 回生)から、以下のような話を聴取している。
「賢治先生はね。授業中にね。職員室からラッパ付きの蓄音機を教室に運んでくるんですよ。そしてスイツツルの夜明けのレコードをかけて下さるんです。説明つきでね。その説明がとても上手でね。私の目の前にスイツツルの山や湖などの風景が広がるんです。うっとりしながらレコードを聴いていましたよ。何回か同じレコードをかけてくれました。」

賢治が、ロッシェニの「ウィリアム・テル序曲」の、とりわけ「夜明け」の部分を好んで生徒に聴かせていたことは、これらの史料や証言から確かなようです。また、賢治自身も好きだったのでしょう。

4, 斎藤宗次郎との交友

M10 ●交響曲第8番(ベートーヴェン)第2楽章／ストコフスキー指揮 フィラデルフィア管弦楽団

M11 ●交響曲第40番 第3楽章(モーツァルト)／ストコフスキー指揮 フィラデルフィア管弦楽団

斎藤宗次郎(1877-1968 岩手県東和賀郡笹間村出身)は、内村鑑三の弟子としても知られるキリスト教徒で、花巻時代、賢治の年上の友人として親交があった。ほぼ 70 年間書き続けた「二荊自叙伝」の1924(大正 13)年 8 月 27 日付にこんなことが書かれている。

典雅、凡庸、虔肅多種多様の西村行

午前十時半独軽装自転車で出発先ず郊外なる農学校に立ち寄り宮沢賢治先生の篤き好意により、職員室に於いて蓄音器によれる大家の傑作を聴いた。最初先生の作詩を New-World Symphony の Largo(約三文字不明)の譜に合せて朗々と歌うを聴いた実に荘厳なものであった。

それより、ヴェーフェン第八シンフォニー アレグロ、モーツァルト ジー調シンフォニー、チャイコフスキー第二シンフォニー、メンデルスゾーン真夏の夜の夢 ウェディングマーチ、ヴェーフェン田園シンフォニー小川の辺り を二人で静かに聴いた。本当に囂らずも僅々半時間の間に此静かなる田園校の一室に最も愛好するヴェーフェンの名曲を聴くことが出来て嬉しく且つ感謝であった。
* 斎藤宗次郎著、栗原敦(編集)、山折哲雄(編集)『二荊自叙伝』上(大正 10 年—15 年)／(岩波新書)



5, 羅須地人協会時代 1926(大正十五年)年～

M12 ●太湖船(中国民謡)／敷島管弦團 (大阪)

* 賢治直筆の譜面が残っている

(羅須地人協会にて)五月にはいと毎週土曜日の晩子ども会がはじまり、グリム、アンデルセン童話や、自作のイーハトーヴ童話を近所の子もたちに話し、反応を確かめた。レコードコンサートが五月十五日、ベートーヴェンのレパトリーではじめられた。これは以降もずっとつづく。農学校でやっていたようにみんなで合奏をやろうと「太湖船」というのんびりした曲をはじめたのが五月二十七日だった。

堀尾青史著『年譜 宮沢賢治伝』「羅須地人協会」図書新聞双書 1966(昭和41)年3月15日初版

M13 ●眠りの精 Sandmännchen(ブラームス)／立松房子(S)

伊藤克己「先生と私達」『宮沢賢治研究』

「花束」関登久也著『宮沢賢治素描』より「宮沢賢治78回転からの着想」P-152

M14 ●「海」三つの交響描写曲 第1楽章(ドビュッシー)／ピエロ・コッポラ指揮 パリ音楽院管弦団

佐藤隆房著『宮沢賢治』富山房 初版 1942(昭和17)年9月8日)

6, レコード交換会

「レコード交換会」とは、羅須地人協会での「持寄競売」という形式で行われ、「レコード交換規定」に基づき1927年10月21日にはじめられた。協会から賢治が供出したレコードを記す「レコード交換用紙」が会員に定期的に配られ、その管理は、仕事もなく困っていた協会の佐藤慶吾が行いわずかながら手数料を得る仕組みになっていた。しかし、売ゆきははかばかしくなく、売れ残りもあった。会員は「レコード交換用名簿」とされる用紙により、七名が確認されているがレコード交換会自体が頓挫する。

既定の案内文の中には、「一反お引き取りをねがひお気に合わなかった際は更にその価格でお出しをねがひます。」その後「お互いなるべく竹針を用ひませう。」とある。竹針は鉄針に比べて音質が柔らかく、盤の溝を傷めないことから賢治は好んで使用していたようだ。

M15 ●ヴェネチアとナポリ(リスト)/ジョセフ・ホフマン

リストがヴェニスとナポリで耳にしたと思われるナポリ民謡「低い窓」(イタリア民謡 作者不詳)の旋律からインスピレーションを受けていると考えられている。

このナポリ民謡「低い窓」という歌が、フランスの作家エクトル・マロ作の「家なき子」Sans famille に登場する。「家なき子」は1903年五来素川(ごらいそせん)訳『未だ見ぬ親』(東文館, 1903)として日本でも出版されたが、賢治が小学校3年の時(1905年)に担任教師の八木英三教諭に読んでいただき、賢治はこれが大好きだったと伝えられている。

この主題歌「低い窓」のメロディが賢治作の「星めぐりの歌」と似ていることから、賢治の脳裏に刻まれたメロディとしてその着想と繋がっているのではないかとの見方がある。

7, 現存するレコード

遺留レコード 宮沢賢治記念館所蔵

M16 ●交響曲第6番 田園 第2楽章(ベートーヴェン)/H・プフィツナー 指揮ベルリン国立歌劇場管弦楽団

M17 ●未成交響曲 第1楽章(シューベルト)/O・クレンペラー指揮ベルリン国立歌劇場管弦楽団

M18 ●交響詩「ドン・ファン」(R・シュトラウス)/A・コーツ指揮交響管弦楽団

M19 ●前奏曲「牧神の午後」(ドビュッシー)/A・ヴォルフ指揮バリコンセル・ラムルー管弦楽団

宮沢賢治記念館所蔵のレコードについて

・・・兄は三十八歳で死んだが、僅かばかり残っていたレコードも昭和二十年の空襲で大半焼けてしまって、猛火の中から古いアルバム一冊だけが辛うじて防空壕に運ばれ助かった。それは兄が一番はじめに求めた「田園」と「未完成」の二つの交響曲と、リヒャルト・シュトラウスの「ドン・ファン」とドビュッシーの「牧神の午後」など二枚がはいっているものであった。

宮沢清六著『兄のトランク』(ちくま書房)「兄とレコード」より

森荘巳池へ贈呈のレコード

●リゴレット抜粋曲(ヴェルディ) ●レオノーレ 第三(ベートーヴェン) ●「パールギェント」より「オーゼの死」(グリーク) ●ローエングリン抜粋曲(ワーグナー) ●シューベルトの夢(シューベルト) ●ソルヴェゼの歌(グリーヒ) ●アヴェ・マリア(シューベルト) ●中央アジアの草原にて(ボロディン) ●禿山の一夜(ムソルグスキー) ●夜想曲 ノクテユルヌ(ドビュッシー) ●アルルの女 第一組曲(ビゼー)

森荘已池(もりそういち)(1907- 1999)は岩手県盛岡市の出身。本名は森 佐一(もり さいち)。賢治と同じ旧制盛岡中学を卒業し、東京外国語学校ロシア語科に入るが中退。岩手日報の記者から作家に身を転じ、1943年36歳の時第 18 回直木賞を受賞。賢治は中学時代の先輩にあたり深い親交があり、1974年出版の著書『宮沢賢治の肖像』には、賢治との身近な交友の思い出が綴られ、賢治を知るうえで欠かすことのできない一冊として読み継がれている。森荘已池に贈ったこれら11枚レコードは、現在四女の森三紗さんが保管している。

沢里武治にまつわるレコード

M20 ●ピアノ協奏曲第 1 番 ハ長調 Op.15(ベートーヴェン) / ケンプ(P) 伯林国立歌劇場管弦楽団

M21 ●交響曲第五番 第 2 楽章(ベートーヴェン) / W・フルトヴェングラー指揮 伯林フィルハーモニー管弦楽団

沢里武治への書簡には“レコードはほしかったら送ります。遠慮なく云ってくださいませか。”として、ベートーヴェン、第五、第六、第九、第一ピアノ司伴奏、ストラウス死と浄化を書き連ねたが、沢里は遠慮してその時は送ってもらわなかったようだ。

宮沢恒治の家族に贈ったレコード

M22 ●スコットランド風の歌曲(5)(ベートーヴェン)コントラルト独唱 / エンミー・ライズナー

M23 ●中音に対する歌謡曲(バッハ) / エンミー・ライズナー、ボツニアツク器楽三重奏団

宮沢恒治は賢治の母イチの弟、賢治の叔父にあたる。恒治の子供たちが音楽が大好きと聞いてこのレコードを贈ったようだ。

* 曲との関連、レコードやエピソード等については、『宮沢賢治と音楽』佐藤泰平著(筑摩書房1995年発売)に詳しく書かれてありますのでぜひ参照ください。その他には主に下記の文献を参考にしております。

『宮沢賢治素描』 關 登久也著 協榮出版社 1955(昭和18)年9月15日

『宮沢賢治』 佐藤隆房著 富山房 初版 1942(昭和17)年9月8日)

『宮沢賢治研究』 草野心平編 筑摩書房 1958(昭和33)年8月15日

『宮沢賢治の五十二箇月』—教師としての賢治像— 佐藤成著 1986(昭和61)年 川嶋印刷株式会社発行

『年譜 宮沢賢治伝』「羅須地人協会」堀尾青史著 図書新聞双書 1966(昭和41)年3月15日初版

『二荊自叙伝』上・下 斎藤宗次郎 岩波書店 2005(平成 17)年 3 月 25 日発行

『四次元 150 号』(宮沢賢治研究会)所収の斎藤宗次郎の「宮沢賢治父子」

『兄のトランク』 宮沢清六著 ちくま文庫 1987(昭和 62)年9月

『宮沢賢治の肖像』 森荘已池著 津軽書房 1974(昭和49)年10月30日

『チェロと宮沢賢治』 横田庄一郎著 岩波書店 1998(平成 10)年7月

『宮沢賢治聲聞録』 小倉豊文 文泉堂出版 1980(昭和55)年6月13日

など

『ポランの広場』に 5 曲、『セロ弾きのゴーシュ』には 4 曲、『銀河鉄道の夜』にも背景の曲として何曲か登場します。

次回セミナー「宮沢賢治とジャズ」で取り上げます。